

明るい哲学をめざす

karinomaki

明るい哲学へ

私は、今まで人生は苦から成り立っていると思い続け、どちらかと言えば暗い哲学をしてきました。しかし、その日々を大切にしつつ、希望への光をそこから編み出していくことをしてみようと思います。人はトラウマから抜け出すことは難しいのかもしれませんが、トラウマの中で苦しみ続け、足を引っ張られ続けることから、少しだけ抜け出したとき、今まで見えなかった景色が広がっているはずですよ。

自分が苦しみから完全に抜けて、そのあと幸せなことしかないかと言えば、そうではないかもしれません。ただ、苦しいことの中を下からもがくのではなく、少し抜けて、苦しい課題があっても上から見下ろすイメージを持ってみてはどうでしょうか。そのイメージを持つことは大きな転換となると思うのです。そのときこそ、本当に苦しみと向き合う強さができており、新しい世界が見えると思うのです。

出会い

私は、カントの実践理性批判がずっと苦手でした。道徳について書いているものだと思います、道徳的になれない自分への引け目から、ずっとこの著書を敬遠してきました。私は、苦しみの中でもがくことが、いちばんカッコいい生き方だと思います、道徳的な生き方を悟ってそれを実践して生きることを、道徳を実践できない苦しみから「逃れる」生き方と、勝手に解釈してしまっていました。私は暗い視点から実践理性批判を見上げていました。しかし、実践理性批判が苦手ということは、私が人生や哲学を明るく考えていないということです。カントは、実践理性批判で、目的の国という理想の国について書いているのです。実践理性批判は肯定的に読むと素晴らしい本なのです。私の暗い視点を、ある二つの出来事が、かえてくれました。

そのうちの一つは、ある人との出会いでした。私の母の友人であるその人は、私が苦しみの中でおぼれるようにして哲学をしていることを知り、そこから私を救おうとしてくれたのです。私は今までの文章の中で、何度も、「躓きの石」を物体で表した指輪を持ち続けていると書いてきました。

カントは、実践理性批判において、自由の難しさ、道徳の難しさを「躓きの石」という言葉で表しています。自由と道徳は、本当に素晴らしい人なら、持っているはずですが、私は、その、「自由と道徳」を実践できて、誰も傷つけず、自分も大切にすることができたとき、「躓きの石」はダイヤモンドにかわってでもいるのだろう・・・とっていました。誰も傷つけない自由や道徳は、宗教では成立するかもしれないけれど、哲学では成立しない・・・だからカントは「躓きの石」と言ったのだと思っていたのです。私は、その石を、苦しいものとして指輪で表し、哲学の軸にすることを思いついたのです。

私は躓きの石の指輪に苦しみイメージを持たせ、哲学の軸にしてきました。哲学は、自由や道徳が成立しにくいという苦しみだけが最も大きな軸なのだと思います。しかし、私が出会ったその人は、私の考え方を何とか明るくさせようと真剣に向き合ってくれたのです。

「躓きの石」は、本当の自由の成立の難しさとして、実践理性批判に登場します。この本がちゃんと読めないのは、私の「躓きの石」へのイメージが問題だったのです。人生の苦しみを完全に克服して、自由や道徳を実践できるのなら、そのとき、躓きの石は心の中でダイヤモンドにかわっているでしょう。そして、そのダイヤモンドに乗かって実践理性批判の中の道徳を完全に実行できているでしょう。それができないから、私は躓きの石の指輪に苦しみのイメージを持たせて、その中でおぼれて、実践理性批判の道徳と自由の成立を、はるか上の方に見上げていました。しかし、イメージとはおそろしいもので、苦しみのイメージが強すぎると、本当に人生は苦でしかなくなっていくのです。実践理性批判は、苦の中から上を見上げる姿勢では、読むことができず、ある意味で、上に立ち、苦をじっくり見下ろす・・・つまり、過去から脱却する必要があったのです。

指輪をやめるわけ

母の友人（Aさんとしておきます）は、私が躓きの石の指輪に苦しい過去を吸収させるイメージを持っていることを知り、そこから私を救おうとしました。私は苦しみこそが、哲学の宝だと思い、その指輪を8年近く持ち続けていたのです。

Aさんは、苦しみを克服するイメージの大切さを教えてくれました。確かに苦しい過去は財産かもしれないが、ある意味で、それを次のステップにかえるべきだと。その指輪は、捨てるにしのびなかったら、家にしまって、持ち歩くことをやめなさいと。Aさんは、私をしばっていた呪縛を解こうとしてくれたのです。

私は、躓きの石の指輪に苦しい過去を吸収させ、トラウマと向き合い続けることを哲学のエネルギーにしてきました。カントも、自由と道徳の難しさを課題にし続け、哲学のエネルギーにしていたと思います。だから、Aさんが、躓きの石の指輪をやめたほうが良いと言っても、私はしばらく抵抗しました。

しかし、Aさんの人生哲学の素晴らしさを知っていくうちに、私は8年間持ち続けた躓きの石の指輪を、Aさんの言うように、やめようと思ったのです。

発想の転換

カントの哲学の日々の中でも、発想の転換期がいくつかあったと思います。そのうちの 하나가、理性に重点をおきすぎる独断論への傾倒をとめてくれた哲学者ヒュームの思想との出会いであり、もう一つが、ルソーの著書である「エミール」との出会いでした。「エミール」との出会いは、カントが、知識や学問のみを人としての徳だと考えていたそれまでの考え方を転換し、人間を尊敬することを学んだ出来事であったようです。

私の哲学を明るくしてくれた、もう一つのきっかけは、親友の言葉でした。私はずっと、「もっと明るい哲学がしたい」と友人に言っていましたが、友人は「左脳をきたえるとよい」と言ってくれました。右脳はひらめきや芸術性、左脳は論理的分析力の脳ですが、苦しみをしっかり分析しきれていないことが、私の哲学を暗くしている大きな原因なのです。

二人の大切な人が、発想をかえてくれたことについて、次の二つの章で分析してみることにします。

アナログとデジタル（一つ目の章）

右脳は、感性の脳でもあります。私は、躓きの石の指輪を、感覚的にとらえていました。物体（躓きの石の指輪）は、まず、感性で直観されます。これが、認識の始まる最初の段階です（純粹理性批判より）。これが、おそらく左脳で分析されて「概念」として認識が成立するのですが、いつまでも物体にしばられ、そこに自分の人生や哲学のイメージを吸収させ続けられ、ずっと、苦しみ分解されないことになります。

右脳は、私の中では、「アナログ」のイメージをもっています。アナログとデジタルについて、簡単に書きますと、アナログは「数値化されていない連続した量による表示」、デジタルは「数値化されたとびとびの数で表す表示」であり、感覚的に物事の全体量をイメージする右脳は、「連続量」である、アナログ的なのです。

もし、物体に心の苦しみや、人生の意味を持たせ続けると、どうなるでしょうか。物体は、感性で受け止めた段階では、まだ分解されていません。さきほど、躓きの石はいつかダイヤモンドにかわるのかと書きましたが、本当にそうはならないのかもしれない。仮にそうなる考えると、それは、躓きの石の苦しみを分解できたときです。躓きの石は、本当の意味でいいイメージを持ち、しっかり分析できたとき、すなわち苦しみを強く明るく分解できたとき、ダイヤモンドにかわるのです。アナログ的なものは、デジタル化されたものに比べると、ものすごく分厚く、大量にたまってしまいます。（ビデオテープがアナログ、DVDがデジタルと考えるとイメージできます。）私の指輪は、このように分厚く大量にたまった、ビデオテープのようなものであり、私の哲学を暗く重い方向に引っ張っていたのです。

Aさんの言葉（二つ目の章）

私の哲学を明るくかえた、きっかけについてももう少し説明します。

Aさんは、私に、高くてもよいものを買って、長年大切に続ける方が、安いものをたくさん買うよりもずっといいと言いました。その考え方を、私は「デジタル的だ」と思いました。

デジタルは、整数値でデータを表します。整数は細かい値ではなく、とびとびです。高くてもいいものを少し買うことも、とびとびかもしれません。しかし、そこに大切なことが凝縮している。安いものをたくさん買うことや、一つの指輪に（躰きの石の指輪は実は800円でした。）たくさんの苦しみの連続を積んでいくことは、アナログ的であり、膨大にふくれあがった物や苦しきは、左脳のデジタルで、分析しないと、暗くて重いものになるのです。

呪いが解けた

Aさんが、私に指輪を持たないように言ってくれたことで、私は、ある意味で呪いが解けた気がしました。苦しみが苦しみを呼ぶということは、確かにあると思うのです。指輪は、持ち続けても、苦しみを吸収して重くなる一方で、ダイヤモンドにはなりません。それより、苦しみを分解し、次のステップにしようと思ったのです。Aさんと親友は、私の暗い哲学に光を差し込んでくれました。カントの哲学上の、「躓きの石」は、それを乗り越え、自由と道徳を手に入れることでダイヤモンドにかわるものと考え、と、「実践理性批判」は成立しにくい道徳を書いた、雲の上の話なのかもしれない。しかし、友人が教えてくれた、左脳の大切さ、分析することの力を信じ、そしてAさんの言うように過去を少しでも克服すれば、軽量で明るいデジタルの世界に飛び立てるのです。そして、きっと実践理性批判はカントが左脳を駆使して書いた、自由と道徳の難しさ（躓きの石）を、明るくしっかりしたものにかえていこうとする、努力の本なのです。そう考えると、私は躓きの石の指輪がいつしかデジタル化（私の中で分解）され、明るい哲学へのステップとなってから役目を終えたことが納得できたのです。

躓きの石

分解して、乗り越えるイメージは、何よりも強いお守りだと思いました。苦しいことと向き合い続ける強さが、ほんの少しわかった気がします。躓きの石は、ダイヤモンドにかわるのかもしれないし、そのままかもしれない。しかし、左脳で分析し、デジタル化することはできると思うのです。それが、ダイヤモンドにかわることなのかもしれません。苦しみの中、もがき続け、いつか、少しでも克服できたということが、成長したということです。それを私はデジタル化と思うことにしました。苦しい連続量であるアナログを、とびとびの数字で表せるように、分解するのです。それは、楽なところに抜けたのとは違うかもしれませんが、課題に向き合う強さを手に入れ、少しだけ苦しみを見下ろすことができたことだと思うのです。物への執着から、抜け出し、しっかりした分析力をもつことが、私が過去の苦しみから抜け出すかぎでした。Aさんは、私が今まで、苦しみを吸収させてきた指輪のイメージを取り去るには、それを放すしかないと思って、私に助言してくれたのです。そして、友人は、今までの苦しみを左脳でしっかり分析することが、明るさへと導いてくれると教えてくれました。

希望への哲学

人生は苦であるという考え方は、この世からも、私の中からも、なかなかなくならないし、それもある意味で正しいのかもしれませんが。苦しいから、人は学んで成長するからです。しかし、マイナスがマイナスを呼ぶという悪循環からは、いつかぬけられるはずです。躓きの石の指輪からはなれることによって、それを明るく分析したことで、私は今まで重いものに引きずられ、下から見上げていた実践理性批判について、少し上から明るく見下ろすことができた気がします。執着から解き放たれるきっかけは、一つのこだわりからはなれることでした。そうすることで、私は新しいステージにのぼった気がします。人生について考えること（哲学）も、私の中で、少しずつ希望への道筋となっていました。苦しいことをステップにできたのだと思います。Aさんとの素晴らしい出会いと、いつも支えてくれる大切な友人が、私を明るい方向へ導いてくれました。私は実践理性批判を苦手としないで、研究したいと思いました。実践理性批判は成立しにくい自由と道徳を書いた、雲の上の哲学と考えていた私は、苦しい課題の中でもがくことから少しだけ抜けた、前向きな明るい分析力でこの本に向かってみようと思ったのです。躓きの石の指輪はダイヤモンドにはならなかったかもしれないし、私の中でなったのかもしれない。躓きの石の指輪は、実践理性批判との本当の向き合い方という宝を私にくれて、その役目を終えました。大切な何かからはなれることが、もっと大切なものと出会わせてくれることもあるものですね。

補足

karinomakiのfc2ブログの、「大切なものをステップにして」が、この文章に少しつながっていますので、よかったら検索してみてくださいね